

河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは生態系の健全さの指標となる生態系上位種のヘビ類や、河川敷の草地環境を利用するカヤネズミなどの確認状況を整理しました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を把握するための参考です。

両生類・爬虫類・哺乳類からみた河川の現況

【シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシの確認状況】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- 全国のほとんどの河川でシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシを確認
地域の生態系の良好さをみるため、生態系の上位種であるシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシの確認状況を整理しました。
今回とりまとめを行った 27 河川のうち、シマヘビは 26 河川、アオダイショウは 19 河川、ヤマカガシは 18 河川で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみるとシマヘビとアオダイショウでは確認河川数の増加がみられました。

（資料掲載：5-8～5-10、5-23 ページ）

確認河川数の比較（対象河川：27 河川）

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
シマヘビ	21 河川	25 河川	26 河川
アオダイショウ	14 河川	20 河川	19 河川
ヤマカガシ	18 河川	14 河川	18 河川

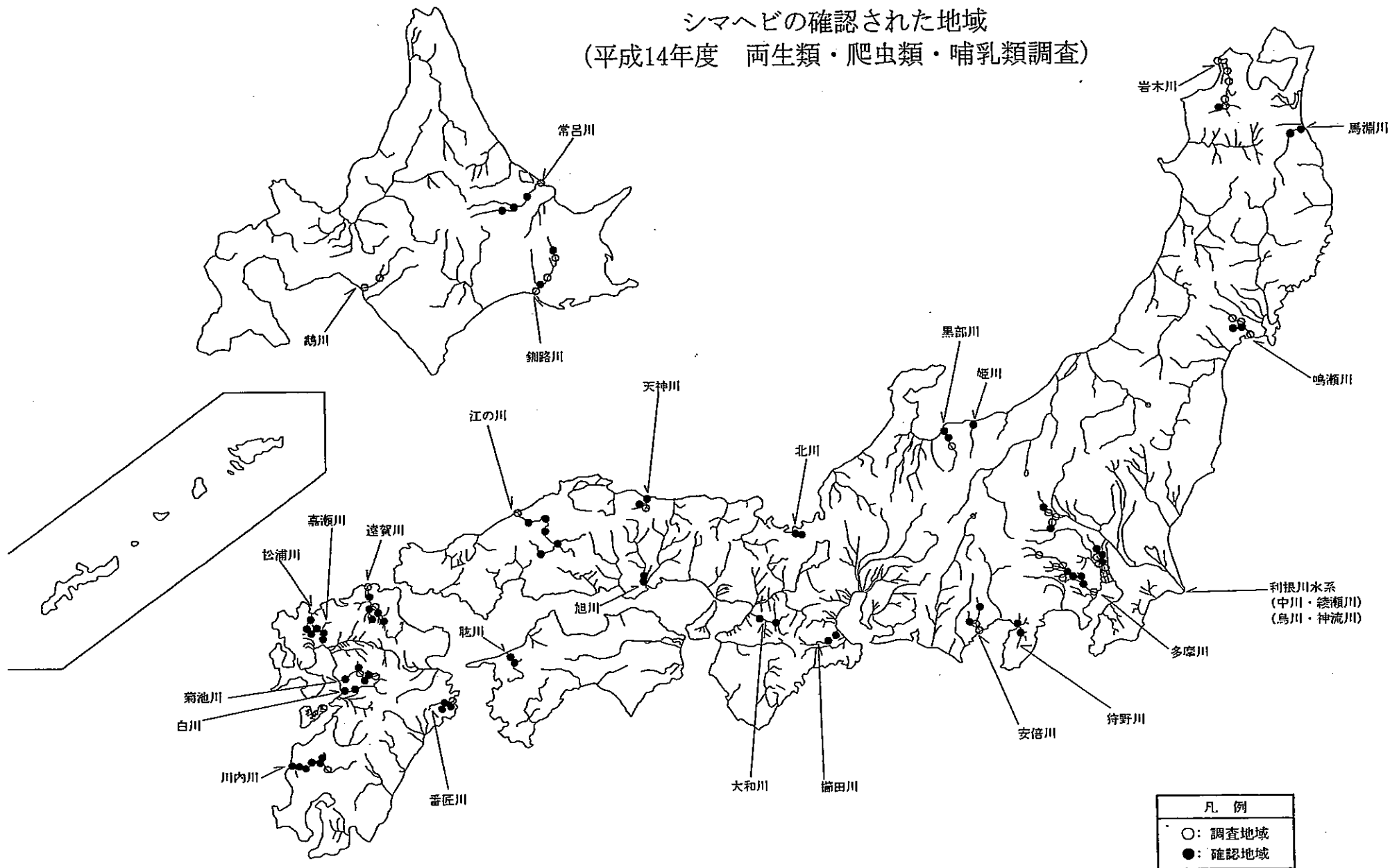
生態系の上位種は、環境変化による種構成の変化、また、それに伴う餌生物の変動などの影響を最も受けやすいことから、地域の生態系の変化をみる上で重要なグループであると考えられます。

シマヘビとアオダイショウは北海道地方から九州地方南部まで分布し、ヤマカガシは北海道地方を除く本州から九州地方にかけて分布しています。今回調査では、シマヘビとアオダイショウは北海道地方から九州地方までの広い範囲で、ヤマカガシは北海道地方を除いた地方で確認されました。

前々回から今回調査をみると、シマヘビとアオダイショウでは確認河川数の増加がみられました。一方、ヤマカガシでは前々回から前回調査にかけて確認河川数の減少がみられましたが、前回調査から今回調査にかけて確認河川数の増加がみられました。

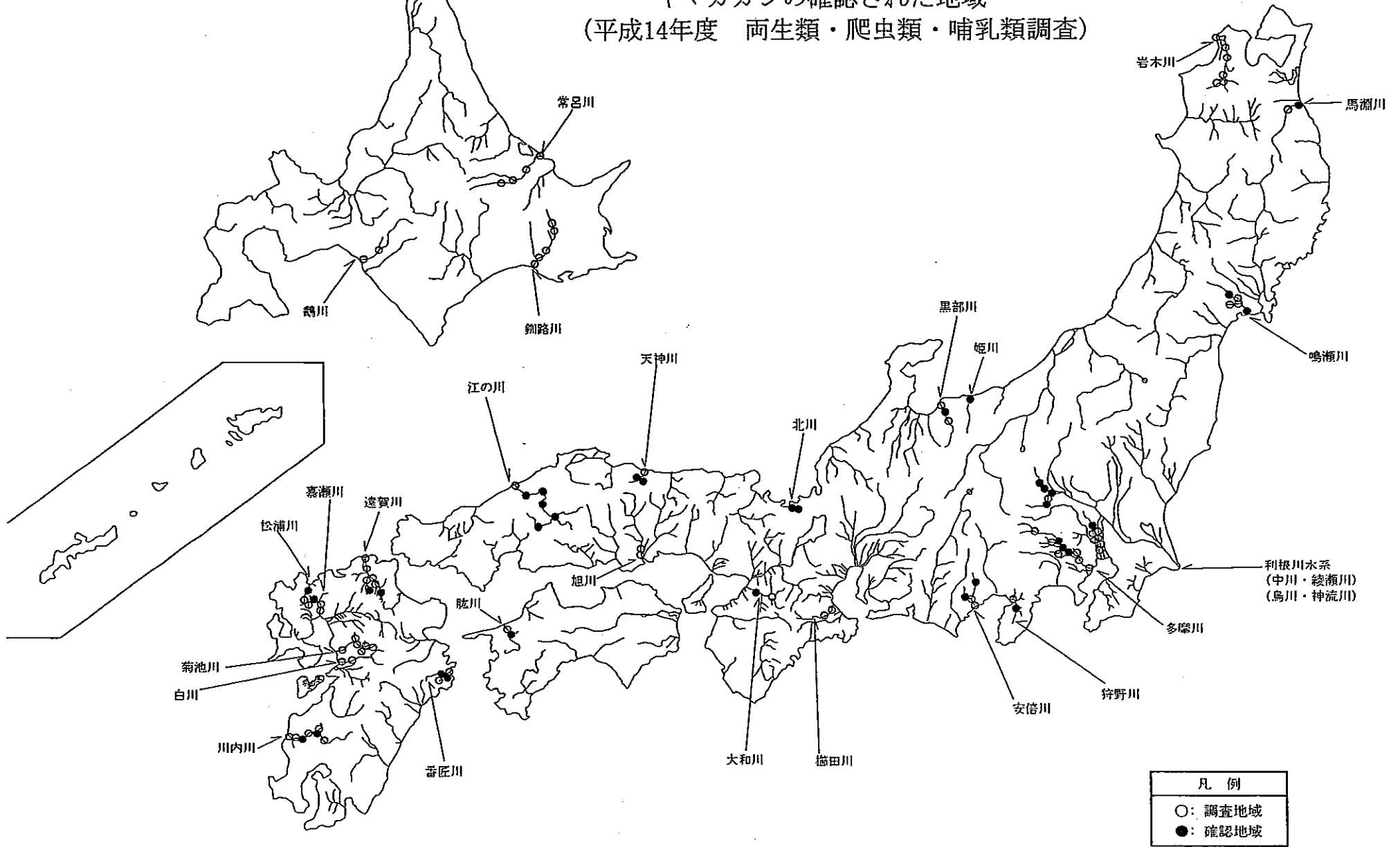
このことから調査対象河川においては、これら生態系上位種の生息が可能な生態系が維持されているものと推測されます。

シマヘビの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

ヤマカガシの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

- カヤネズミを関東以南の 19 河川で確認

高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するカヤネズミは、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。そこで、確認状況の変化から、河川及び河川周辺環境の変化の把握を行いました。

今回とりまとめを行った 27 河川のうち、北陸地方を除く関東地方以南のすべての河川で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると確認河川数の増加がみられました。

(資料掲載: 5-12、5-23 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 27 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
カヤネズミ	11 河川	18 河川	19 河川

カヤネズミは本州の太平洋側では福島県以南、日本海側では石川県以南、四国、九州、隠岐、淡路島、豊島、因島、対馬、天草諸島下島に主に分布します。高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣する本種は、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。

今回の調査結果をみるとカヤネズミの確認範囲は、北陸地方を除く関東地方以南となっており、一部を除いて従来知られている分布範囲で確認されました。カヤネズミは河川整備などの影響で生息域が狭められ、生息数も減少していることが知られています。従って、今後も引き続きモニタリングを続け、本種の生息状況を明らかにしていくことが必要であると考えられます。

カヤネズミの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

